是を以て、克く天心を享け永く宝暦を膺け、太一[1]もて文明の盛治を統べ、万世に太平の昌基に際う。臣尚豊、海国に僻居し、聖育窮まり無きを荷蒙するも、補報を伸ぶる莫し。臣国、土産もて進貢して芹曝の微忱を比献[2]し、紫宸を仰ぎて三祝し、聖寿の以て天と斉しきを祈る。天を瞻み聖を仰ぎ激切屏営の至りに任うる無し。謹んで表を奉り貢を称して以聞す。

崇禎九年（一六三六）十月初八日

注　（1）太一　万有を包含する大道。天帝。
　　（2）比献　比はならべる、そなえるの意。

1-13-14　国王尚豊の、皇太子あての進貢の箋（一六三六、一〇、八）

琉球国中山王臣尚豊、謹んで聖旨を奉じ、欽遵して三年両次に朝貢す。茲に届期に当り、伏して箋を奉り進貢する者なり。臣尚豊、誠忻誠忭、稽首頓首して上言す。

伏して以うに、天、景運を開きて大本は益〻隆く、宗社、奠安して臣民は忻戴す。敬んで惟うに、皇太子殿下、性稟聡明にして、緝熙の聖学あり、令徳は三善を備え、仁聞は万方に昭らかなり。是を以て聖謨を弼相し、民安んじ物阜なり。臣尚豊、海国に僻居し、聖育窮まり無きを荷蒙するも、補報を伸ぶる莫し。臣国、土産もて進貢して芹曝の微忱を比献し、前星を望みて恭拝し、叡算を千秋に祝る。瞻仰し激切屏営の至りに任うる無し。謹んで箋を奉り貢を称して以聞す。

崇禎九年（一六三六）十月初八日

1-13-15　国王尚豊の、進貢の表（一六三八、一〇、二〇）

琉球国中山王臣尚豊、誠懽誠忭、稽首頓首して上言す。

伏して以うに、天、下民を佑け、四時序ありて風雨順い、五穀熟して民人育つ。恭しく惟うに、皇帝陛下、天を承け命を受け、宇内に君師たり。相して以て之を奠め、和して以て之を安んず。是を以て、克く天心を享け、永く宝暦を膺け、仁恩を四海に溥め、太平を万年に建つ。臣尚豊、海藩に僻居して、聖育窮まり無きを荷蒙するも、能く補報する莫し。臣国、土産もて進貢して芹曝の微忱を奉献し、紫宸を仰ぎて三祝し、聖寿の以て天と斉しきを祈る。天を瞻み聖を仰ぎ激切屏営の至りに任うる無し。謹んで表を奉り貢を称して以聞す。

崇禎十一年（一六三八）十月二十日　琉球国中山王臣尚豊、謹んで上表す